

進撃のコロボックル

(146点 ペインティング 方眼紙 B1)

中世風の社会を舞台に民族間の紛争が繰り返される漫画『進撃の巨人』では、ウルトラナショナルリズムに近い機能をもった国家が描かれています。そこでは、外部の脅威、人間に似た姿の怪物たちとの対比によって、人類が定義されています。このパラダイムのなかで人類を救おうとする主人公は、その8割を排除するに至るのです。

1887年から1913年にかけて東京人類学会では、「穴に住む人」を意味するとされたコロボックルという名の先史時代の人々について、その仮説をめぐる科学論争がおこります。この原始民族との差別化によって日本人のアイデンティティを定義することを可能にしたのは、他者をめぐる言説により自己を規定する他者参照的な人類学言説でした。エドワード・S・モースが1877年に発見した大森貝塚により、陶器をつくり食人風習を持つ民族が存在した可能性を示唆していました。この民族を指すものとしてコロポクグル（コロボックル）という名前がはじめて学説としてあらわれたのは、1882年のジョン・ミルンの論文においてでした。伝説上のコロボックルの人々をめぐる論争は、1913年の坪井正五郎の死とともに終焉を迎えました。(cf. Arnaud Nanta, *Débats sur les origines du peuplement de l'archipel japonais dans l'anthropologie et l'archéologie (1870-1990)*, thèse de doctorat Paris 7, 2004)

146点のペインティングからなる《進撃のコロボックル》シリーズでは、B1サイズの方眼紙に『進撃の巨人』から引用したセリフと穴に入った巨人を描いています。一般的には芸術の生氣論と科学の貧弱な機械論は対置されますが、それはだまし絵のようなものかもしれません。ペインティングから離れて見ると、方眼紙は形而上学的背景のようにみえます。しかし近づいて見れば、描かれた身体が帯びていた揺らぎは魂のない色のかたまりに過ぎません。それにもかかわらず、これらのペインティングを目にするロマンチックな夢想家は、その生氣のない物質性もやはりなんらかの原始的な汎神論をあらわしているのだと自分で自分を説得する可能性があります。ペインティングとは、架空の民族のようにイデオロギーの鏡に他ならないのかもしれません。

フレデリック・ヴェジェル